

視察報告

あさなえ学園家庭教育支援チーム「あさらぶりん」

三鷹市教育委員会



- 日時:2月8日(木)14:00~16:00

- 場所:三鷹市教育センター

- 指導者:三鷹市教育委員会事務局 教育部 教育政策推進室 室長 越政樹様

統括スクール・コミュニティ推進員(三鷹市教育委員会委嘱) 四柳千夏子様

三鷹市教育委員会事務局 教育部 教育政策推進室 主査 國友彩加様

- 参加者:田村和民、金子功一、下地俊男、寶迫美樹、西谷由衣

三鷹市の背景

- 人口19万人余り
- 東京都区内に接しているが、コミュニティ行政が早くから導入されておりコミュニティが残っている。
- 地域コミュニティを軸とした大人同士のつながりが確保されている。
- 子どもたちの行事に地域住民が参加し、多様な活動が進められている。
- 予測困難な時代を生き抜く力（「人間力」、 「社会力」）の育成



三鷹市のコミュニティ・スクール

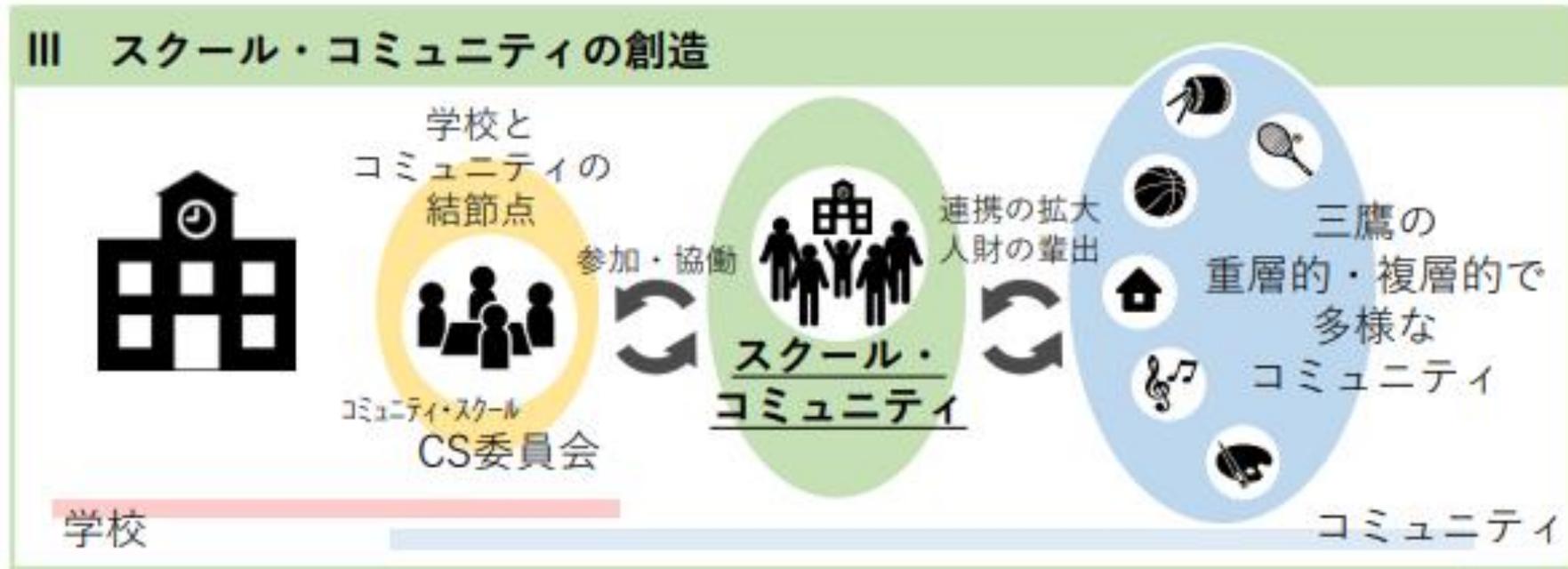
- 各学園にコミュニティ・スクール委員会(学校運営協議会)を設置
- CS委員の任期は、1期2年(最長4期8年、役員は2期4年)
- CS委員のための詳しい紹介資料やマニュアルが作成されている。
- 各学校にスクール・コミュニティ推進員(地域学校協働活動推進員)を配置
⇒地域コーディネーター、保護者コーディネーターなどの役割を担っている。
- 教育委員会の伴走支援が充実し、教育委員会と地域が協働しコミュニティ・スクールを進めている。

市のリーダーシップ

- 市教委の強力なリーダーシップがある。
- 教育政策推進室を設置
- 学校単位のCSを超えて、三鷹市の方針としてCSを前提としたまちづくり
- 全国コミュニティ・スクール連絡協議会の事務局

スクール・コミュニティの取組

- 学校を縁として地域がつながる仕組み
- 学校は地域の共有地



スクール・コミュニティの取組

- 「社会に開かれた教育課程」
 - ⇒社会の中で使える知識・技能を地域の中で学ぶ。
 - ⇒地域資源を活用し、社会と接続した学びを提供する。
- 学校の教育課程とは離れた地域活動に子どもたちを巻き込む。

学校を活用するが、地域が主体の取組

学校3部制

- 学校を3部に分け、第2部、第3部として学校を地域に開放
- 地域が学校を有効活用する仕組み
- 学校を地域で活用するための機能転換、教職員の負担軽減(鍵の管理)等が課題

スクール・コミュニティの創造を加速する学校のあり方
地域の共有地（commons）としての学校への移行

「学校3部制」

第1部



学校教育の場

第2部



放課後の場

“多様で豊かな
「新しい放課後」”

第3部



多様な活動の場

学校 3 部制の学校活用事例

- 普通教室での「放課後子供教室」

→放課後児童クラブ（学童）とは別物で、地域の方が中心となって運営している。

「校庭開放や教室開放、イベントなどを実施

国や県、市から補助金あり。

- 家庭科室を活用した朝食提供

あおばコミュニティ・テラス

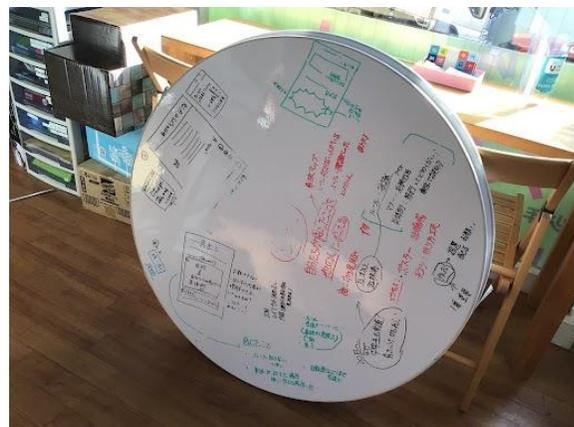
- 日時:2月9日(金)10:00~12:00
- 場所:あおばコミュニティ・テラス
- 指導者:特定非営利活動法人まちと学校のみらい 代表理事 竹原 和泉 様
特定非営利活動法人まちと学校のみらい 副代表理事 武智 理恵 様
- 参加者:田村和民、金子功一、下地俊男、西谷由衣



あおばコミュニティ・テラス

- 東急田園都市線 市が尾駅から徒歩5分
- 高層住宅地が並ぶ駅前通りの一等地にある、公設民営のNPO法人
- 公園が隣接し、そこを見渡す屋外テラスがある。
- 青少年の地域活動拠点として、まちづくりや地域のボランティア活動を積極的に実施
- 学校でも家庭でもない「サードプレイス」として、子どもたちの居場所にもなっている。中高生だけでなく、小学生や地域の大人たちも集まり、地域のつながりの場としても機能している。「場」の力、場所があるから集まる。

あおばコミュニティ・テラス



寄り添いから自立へ

- 子どもたちの自主性に任せる。
- 居場所を求めて立ち寄る子には寄り添うが、大人の支援は必要最小限
- 先回りしたりルールを敷いたりしない。
- 「個別最適」な環境を提供している ⇒ 参画のはしご
 - ① 居場所として集う(サードプレイス)：自習、おしゃべり
 - ② プログラムに参加する：イベントや夏休みボランティア活動に参加する。
 - ③ プログラム運営に参画する：プロジェクトチームに参加、イベントやワークショップの運営
 - ④ 自らプログラムを発案・企画・実行：興味関心のあるプロジェクトを立ち上げて、まちの魅力づくりや地域課題の解決に取り組む。

子どもたちが行うまちづくり

- ボランティア活動への参加（あおばユーストライ）
- 多世代交流や異文化理解、地域整備プロジェクトなど、中高生が自らまちの課題を見つけ、チームになって課題解決に向けて取組を行っている。
（あおば未来プロジェクト）
- 有志によるまちづくりプロジェクト
 - 「落書きフェスタ」や「打ち水イベント」などイベント開催
 - 特産の梨の皮を活用した香水の開発
 - 小学生のための防災教室

場づくりの必要性

- 校内のコミュニティスペースは赤ちゃんからお年寄りまでずっと入ってこられるよう、敷居を低くする必要がある。
- 場所があるからつながる。学校が地域の拠点になるように「場」を整備することが重要
- 「地域の場所」として、学校とは独立した場所がいい。シャッターで分けられて、学校が開いていなくても地域が使えるようになっていて、水場やトイレも独立していると良い。（「学校は安心、地域はのびのび」が理想）

場づくりの必要性

- 机やいすはすべて可動式にし、場所の雰囲気づくりをみんなで進化させていけるような形が良い。
- 場づくりに子どもたちを入れると、「自分の場所」、「自分事」としてその場を大切にしてくれる。
- 防災拠点になることも視野に入れておくと良い。

場づくりの必要性

- 学校に関係なく地域の活動として学校を活用することも考える。
⇒木工教室や PC 教室、料理教室など。図書室を地域開放しているところも。
- 学校に「使わせてください」と言わなくて済む設備やシステムの整備が理想
- 新校舎に地域の居場所をつくるなら、そこを使う地域の意見をしっかり取り入れてもらうことが重要。ぜひ話し合いに参加を！

今後の地域活動について

- 地域活動は学校の活動と違って制限時間がない。子どもに問いを立てさせ、できない子は待つ。これからの時代を生きる子どもたちの発想力や発信力を育てるのに地域は重要な役割を担っている。
- 部活動の地域移行は、地域活動の契機になる。放課後の活動の場を提供したり、参画のはしごを参考にプログラムをつくったりするなどして、地域活動を活性化していくことができるのではないか。

今後の地域活動について

- 地域連携カリキュラムの中で、学校のカリキュラム内か、地域の活動かを可視化し、責任の所在を明確にすることが必要
- ボランティアで学校が生徒を派遣するときに、地域が責任を持つのは限界もある。「待っている地域の人がいる」と派遣する側はきちんと指導しなければならない。
- 「ボランティア証明書」や、「ボランティアスタンプカード」を導入するのも良い。

今後の地域活動について

松林保全活動について

- 松葉が大量に出るならそれを有効活用できないか？
- 企業や専門家と連携し、子どもたちでワークショップをしてみても面白い。
- 地域の企業との連携は重要！
- まちづくりの一大プロジェクトになるのでは？

見えてきた課題や今後に向けて

- 教職員の働き方改革との矛盾
 - 学校の鍵の管理や、ボランティアに生徒を参加させる際の責任の所在について、地域と教職員がもっと対話する。
 - 「子どもたちのために」という思いを皆が持って活動を行う。
- コミュニティ・スクールを進めていくうえで、悩みが多い。
 - 三鷹市も浅江も同じ悩みを抱えていた。同じ立場や、同じ意志をもって地域活動に取り組んでいる人と互いに悩みを共有したり解決策を探りあったりする場がこれからもあるといい。

見えてきた課題や今後に向けて

- 学校運営協議会委員の入れ替わりを積極的に行う。
 - マンネリ化を防ぐ、地域の人材を多く活用できるメリットがある。
- CS 活動のマニュアル化
 - 誰が学校運営協議会委員になってもわかりやすいようにマニュアルを作成する。文字だけではなく絵も入れて読みやすいものを作成する。
 - 異動してきた教職員にも見てもらえるといいのではないか？

見えてきた課題や今後に向けて

- 市(行政)と地域の連携
 - 金銭的な支援や、設備の利用については行政の協力が不可欠
 - 地域も気持ちよく活動できるシステムを構築が必要不可欠
- 地域と行政、地域と教職員、教職員同士の対話をもっと必要
- 「子どもたちのために」を最優先に考え協働する。

見えてきた課題や今後に向けて

今後の計画

- 移転に伴うコミュニティルームに関する話し合いをぜひ！
- 松林保全活動に関するプロジェクト
- 放課後の子どもたちの活動・居場所づくり
- 朝食提供（フードバンク活用）
- 先生と地域の対話の場「先生サロン」3月27日9:00~の実施